

● 座談会 「審査を終えて」

出席者 審査員 佐野 めい (画 家)
審査員 田口 安男 (画 家)
審査員 中山 忠彦 (画 家)
審査員 安永 幸一 (美術評論家)
審査員 淀井 彩子 (画 家)
(五十音順、敬称略)

全体的な印象、特に印象に残った作品について

安 永：今回、進行役を務めさせていただきます安永です。どうぞよろしく
お願いいたします。

最初に、まず全体的な印象、あるいは特に印象に残った作品のこ
とについてお話しいたきたいと思います。

田 口：割合にモノトーンの商品が目立つというか、その方向がよくなっ
てきてる感じ。世の中もモノトーンだからということなんですか。

ない物ねだりをすれば、何かケレン味なく絵の具をぶつけた・塗っ
た作品も、数あっていいのではと思いました。

それから、いい悪いの問題ではなく、表現の過程でただ描くんじゃ
なくて、こちらが分からないぐらいに、プリント的で間接的な技法
を織り込んでいる表現がとても成熟してきたということがあります
ね。

中 山：まず審査をしながら感じたことは、画面の形として、今は正方形
全盛の時代かなあというふうに思いました。その点、大賞をとった
のは通常のFサイズですから、そういう全体の感じからいうと例外
的なものかもしれません。

安 永：100号の長い寸法の方にみんな合わせてきてるんでしょうか。

中 山：そうですね。多分、制限のサイズの中で一番面積の広いのが正
方形ということだと思います。これは今の一般的な団体展や公募
展の一つの傾向のようですね。制限寸法以内に、とにかく大きく
とるということなんです。

それともう一つは、結果として非常に変化に富んだ具象から抽象
までの作品が選ばれたということにおいて、妥当な審査が行われ



佐野 めい



田口 安男



中山 忠彦



安永 幸一



淀井 彩子

回も確か賞をとられている方だと思います。

田 口：線状の主な表現で、リズム感は決して悪くない、嫌いじゃないです。ただ、線と線の交わる角度が、みんな同じような角度で交わっていて単調です。

例えば、飛行機が着陸するとき、滑走路にすべり込むように接近する。だが、直交するように近づけば墜落…。画家の引く線と線との接近、交錯にあっても、こうした多様性があるといい。

幼児が画面に線を引き回すとき、次第に繰り返しが多くなっていく。画家は、そういう段階からどう抜け出せるのか。籠とか織物の線状のからみ合いにも豊かな多様性がある。そのあたりのことを制作の場で、どう直感的にすくい上げることができるかどうか。

中山：私は逆に言えば何かこう、法則に縛られないというか、そういう自由さが羨ましくてしょうがないんです。

私は、物を描くときには、形、色、調子、いろんなものが絡み合ってきて、がんじがらめになってしまうんですけども、そういうものから開放された状態で仕事をできる人は、非常に羨ましく思います。やはり、この線状の中のいろんな運動が持つものが、四隅に対しての影響をほとんど与えていない。全部四隅まで、四隅はもう全部省略したかなあと思うような画面にしか感じられない。ですから、画面としての力強さを求めるための方法を、色なり形なり線のリズムなりを使って、もっと強く深く考えてもらいたいと思います。

佐野：私は、同じ仲間として仕事をしてるなかで、彼女が紆余曲折している時代に、「描け、もっと描け」、そして「描け」というふうに関心を入れてきたんです。この方の特徴は線なんですよ。線で物語る。物語るというか表現していくということでは、さっき田口先生がおっしゃった角度の確率だとかも頭に入れて、描き方の研究をされた方が良く思います。ほかに線で表現してるという人が余りいないので、線は捨てないで行った方がいいですし、この人の特徴です。だからこそ、皆さんの目にとまって、残ってきたんだ



chat over tea
162cm×162cm
南波 久 東京都

と思います。

色彩も、色の面積、構図を、最初に考えて、どこを描かなければいいのかとか、どこを捨てるのかとか、もっと研究して下さい。

やはり線というのは昔の武者絵とか、写楽など、ああいう人たちの抽象的な表現にはかなわないですね。だから、この絵は抽象的に見えるけどもあくまでも具象ですね。

それから、光る描き方じゃなくて、光らないことをやってます。後から線を引きますから、光る画面は要求しません。

中山：なるほど。色を使う人は絵の具の艶を嫌うとよく言いますが。

佐野：絵の具の場合は艶じゃなくて光が欲しいんです。それが艶になる場合、邪魔になることがあります。

淀井：あの方の場合は抽象というより非常に具象ですよ。奥行きのある風景のような、何か建物のような。ピエラ・ダ・シルバという画家がいますが、ああいう、すかっとしたものが入ってくるというかなと思います。描いていけば、どんどん重苦しくなってくるでしょ。もう少し洗練されると良いですね。

安永：でも、線はきれいで、おもしろいですよね。

優秀賞の作品について

安永：優秀賞についても、1点ずつコメントをお願いします。最初は、22歳の女性の作品で「望郷」です。

田口：余り絵を作ってるという感じじゃなくでか上がってるところが珍しい、いいと思います。絵の具やストロークも多様で、ある粘っこいヌルツとした、みずみずしさがある。絵の具に、モノトーン状だけけどいろいろな色があって、いい。大きいストロークと繊細な線とが随所にうまく組み分けられている。

しかし、そういうことを計算じゃなく、ひたむきにストレートに描いてる人なんでしょう。そういう若さの単純なエネルギーをもって、かなり押し切って成功した絵だと思います。

安永：地平線の高さと頭の高さが揃っている所が気になります。

中山：私は一番気になるのは、その地平線です。これだけ俯瞰して人物を見る場合に、地平線というのはもっと上に上がるか、あるいは画面からは消えてなくなるぐらいの状態でもいいだろうというふうに思いますから。やはり基本的な物の組み合わせというか、デッサンの問題だと思います。

安 永：私も最初からそれが気になっていました。

中 山：私も同様です。

佐 野：先生方がおっしゃった地平線ですが、あれはおっしゃるとおりで、描く位置でもっと絵が違ったと思いますが、ここに白いTシャツみたいに形があります。彼女のセンスで面白いです。この線がなかったら暗くて重くなりますよ。この人はやはりこれからも自由に描き続けて下さい。

田 口：足も画面からはみ出して、それがつたないのかもしれないけど、やはりそれは地平線の取り方と同じように問題はあるんだろうけど、そういう欠点があってもいいと思います。一生懸命なところを応援をしたい。

淀 井：素直な感じで、いいんじゃないかと思います。格好を余りつけてなくて、そういう素直さが面白いですね。

安 永：次は「Message 2011 (祈)」です。60歳の方の作品です。

田 口：ある程度の若さの方かと思ったら違いました。キャリアがないと、これだけのことはやれないということでしょう。

安 永：多分、そうだと思います。私もそんな感じがしていました。

田 口：エネルギーのある仕事です。

中 山：私も、年齢と作品のギャップが大き過ぎて、逆に言えば非常に若さが羨ましいです。

佐 野：やる気満々で何にでも挑戦していくということが、よくこれに表れていますね。
その意識がかえってない方がというか、これに出品して、こういうふうな絵を描いてということをやったら、この次描かれるときにもう少し絵を変化させていくのではないのでしょうか。

田 口：それはどうでしょう。逆におとなしくなって、だめになるんじゃないのでしょうか。

佐 野：そうですか。

淀 井：もう一つ、洗練させたいですね。

佐 野：上を向いて歩こうの方がいいですか。

田 口：僕は、これがもっと洗練されて完成されたら多分平凡になると思います。

佐 野：なるほど。

田 口：そう見たくなるような、おもしろい作品だと思います。

佐 野：本当に、見てすぐおもしろいなと思いました。
色が同じ黄土色系ですか、そういう強さみたいなのを感じます。

田 口：年齢からいっても、この人の代表作になるんじゃないですか。

安 永：そうですね。ある種の完成度がありますよね。

中 山：正方形の画面の扱いを非常に心得ているなと思いました。

安 永：次は「増殖」です。田口先生、先ほど影の扱い方についておっしゃっていましたね。

田 口：影の扱い方が新鮮というか、絵画における空間の次元の問題に
対決していて、とてもいいと思います。
色からいうと、モノトーンの系統だから不満はありますが、筆触が動いている部分もあるし、何かうまい言葉がないけれど、画面に多元性があるいい。

中 山：私は、これだけ何か見事に約束を排除して、だだっ子のように絵を描いてみたいと思います。

安 永：影というか、そういうものが意識の中にあると思います。

佐 野：私は、わけのわからないようなおかしさがある不思議なところが面白いです。それで画面全体には、和室？

安 永：和室でしょうね。

佐 野：下が畳みたいに見えるので、小さく孤立した空間で、いろんなところに無作為に物を置いていったと思うんだけど、実はよく計算がされている。
一つ気になるのは、上の方にピンクと白、あれをもうちょっと考えていればもっと雰囲気にごみが出ると思います。

安 永：確かにそうですね。



儂い時を刻むもの
162cm×162cm
小木曾 誠 佐賀泉



更新の因果
162cm×162cm
桜岡 みゆき 東京都

佐野：そうすると、この人の本領がよく出てきますね。

田口：狙いとしては、そういう違和感のあるタッチをはっきりと置きたかったということでしょう。

安永：影ではない部分、子供みたいな人物が襖か何かに絵を描いているところ、そこがもう少し…。よく見ないと何が描いてあるのか見えないというのが、ちょっと…。

中山：頭の描きようかなと思います。何となく白髪に見えてきて。

佐野：わざと白で、すうっとかけたんですかね。

淀井：物語性があるんですね。

安永：なるほどですね。

次は、「進む日」という優秀賞の作品です。

田口：前景、中景、遠景と分けて考えると、手前、前景の部分はコンクリート片などのプラスチック、立体的な表現で、これは破壊の状況なのでしょう。中景に移ると実体の表現というよりは、淡い影のところに表現の狙いを移している。画面全体が一様な表現でないのいい。モノトーンの風景にもものたりなさがありますが、若い人の深い感性があるとみました。

中山：題名から見てもそうだろうと思いますが、今度の大震災のイメージがこの作品から感じられます。

安永：瓦礫でしょうか。

中山：瓦礫でしょうね。日常というものから、いきなりこういう状態になった場合の一種の心象を写実的に表現してある。遠くから見るとかなり緊密に描いてあるようなんですけども、近くで見ると、そんなに描いてないですね。これは、一つのテクニックとしては、立派なものだと思います。細密に描いて緊密に見せるという方法が今非常に多い中で、この方法というのは、ちょっと極端ですけども、ベラスケスの近づいて見たらあまり描いてないけども離れて見ると写実そのものだったような表現に共通するテクニックがあるように思いました。なかなか力量を持った人だろうと

推測します。

佐野：そばに寄って見ますと、色彩の変化はたくさん使っていますが、遠くだとそういうものがないという、まとまりというかな…。

安永：アクリルを使っていると書いてありますね。

佐野：いろんな材質のものでね、もっと空気をうんと吸いたいと思うんですけど…。紙飛行機が飛んでますよね。

安永：紙飛行機が先生はお気に召さないんじゃないですか。そういうことはないですか。

佐野：はい。それが絵の若々しさだと思いました。

中山：希望のシンボルみたいですね。

佐野：テクニックは十分出来ているので、そういうことでは確かに好ましいです。

安永：そうですね。隅々まで力を抜かずに、若い精神的な緊張感みたいなものを感じますよね。

中山：そうですね。

佐野：その緊張感が逆に、そこで深呼吸をしたくなるという、そういう強さですね。

安永：優秀賞の最後の1点です。57歳の方の作品で、「ねえ鼻になりたいね 森の深くで眠りたい-XX」という、非常に文学的なタイトルの作品です。

田口：こういう異質なものに意欲的に取り込んで、いやらしいぐらいに、これでもかというところまでやり切っているところは、すごいと思います。この人の仕事の中で、これがどういう意味を持つかは後のことですが、やるだけのことをやった仕事。感心します。

中山：私は、立体的、写実的な表現と、それから全く平面の異質な部分との組み合わせがおもしろいと思います。とても私どもの世代から遠いし、画面から受けるものは何か想定外というか…。

佐野：私は今この題を見て、題のつけ方が余りにも第三者に納得させるような題ではないのかと思います。



望郷
162cm×112cm
安中 仁美 茨城県



進む日
162cm×162cm
小川 道久 大阪府

安 永：説明的過ぎますか。

佐 野：ボルトでオブジェを締めたり、随分様々な技法を使っている、そういう様々な研究の効果は出ています。その顔のところは、わざとですか、リアルみたいな具象なんですけど…。

他の先生方は、どういうふうにお考えですか。

淀 井：首の部分が、不自然過ぎると思います。

安 永：ちょっと気になりますよね。

中 山：それが彼の狙いじゃないですか。

佐 野：返って、そこに目がいきますよね。そういうふうに見せている…。

中 山：それが見せ場なのかもしれないですね。

佐 野：そこは不思議だなと思うでしょ。だから一点集中で、目がいきます。それがいいのか悪いのかわからないということです。

淀 井：羽とかは、おもしろく描いてあるんだけど、そこをどうにかしたいということですね。

奨励賞の作品について

安 永：それでは次に、奨励賞の「DRAWING PHOTOGRAPHY 1103」「Figure nude I」「リフレインIX」「死滅回遊」「刻々と移る」の5点について、特に取りあげたい作品があれば、一言ずつお願いします。田口先生、いかがでしょうか。

田 口：「DRAWING PHOTOGRAPHY 1103」についてですが、これは描いているというよりは、現代の写真など、変換の技法を徹底して使っているんでしょうけれども、絵の具で存分に苦労して描いたような感じがあって、こちらがわからないような現代の様々なプリントの技法を使って、その結果として、写真的なおとなしい、写しの表現じゃないところが出てくるという意味では、やはり無視できない作品です。

安 永：「写真とドローイングの相剋」と作者のコメントがあります。

田 口：そういう自由なドローイングがどう入っているのかはわからないけれど、写真技法の変換のテクニックかなと思って見ますけど、力量ありますね。

安 永：そうですね。デジタル画像が流れるときの感じを非常にうまく提示している。そういう意味では現代的というか、今日的な作品だと思います。私は結構好きですね。佐野先生、いかがでしょうか。

佐 野：5点の中でいいますと、やはり、線で描いているあの一番若い20歳の方の作品が気になります。

今は、いわゆるパソコン、CGを使う時代で、そちらに目を向ける



Message 2011 (祈)
162cm×162cm
窪田 正博 福岡県



ねえ鼻になりたいね 森の深くで眠りたいーXX
162cm×162cm
佐藤 光郎 宮城県



増殖
162cm×162cm
横田 招 広島県

人が圧倒的です。逆に、この方の粘り強さと情熱を大いに推薦しますね。

中 山：この人も女の人なんですわね。

佐 野：これだけ克明に描いていく、そういうファイトみたいな執拗さ、一途さが好ましいです。

田 口：そうですね。線を引き続ける行為に集中力があって、やりきってるという点が、やはり若い人に恵まれた集中力なのでしょう。

佐 野：そういう20歳に大いに期待してます。

もちろんCGのやり方を否定してはいません。けれども、手で描く、そういう黄金の腕をつくるということも、もっとたくさんの若い世代にやってもらいたいと思いました。

中 山：そういう意味では、手法は違いますが、レンブラントのエッチングみたいな執着を感じますね。

佐 野：ただ描いてるんじゃない、絵としてもでき上がってるから、先生方

がぱっと見たときに思わず前へ寄ってごらんになっていらしたんじゃないでしょうか。

淀井：平凡かもしれないけど、「刻刻と移る」の色彩が心地よいかと思います。

田口：こういう色の作品が少ないですね。

淀井：今は少ないです。

佐野：色彩がとても美しく魅力的ですね。ほっとします。

中山：ああいうピンぼけ、焦点が合わないレンズみたいなものの中でいろんな遊びができるという一つの方法なのかと思いますけど。

美術界の発展に向けて

安永：長時間にわたっていろいろお話いただきましたけれども、最後に美術界全体への感想とか発展に向けて望むこととかがございましたらお願いします。

佐野：私はずっと東日本から出たことがないので馴染みが薄いのですが、こちら西日本というか西の人たちの中から作家、巨匠がたくさん出てらっしゃるんですね。それに続く巨匠は必ずこういうところから出てくると信じています。

安永：明治・大正のころは確かに九州から多くの大家が出ましたけれど、最近はそうでもないですね。昔に比べれば、ちょっと元気がないのかなという感じはあります。



Figure nude I
117cm×45cm
橋本 千恵子 兵庫県



刻刻と移る
130cm×162cm
植木 敬子 茨城県

佐野：私の年代あたりだと、小説や詩などの文学の方だとそんなに怖じ気づかないですけども、絵になると急に西に比べて東は…、という気がいたします。

今の同世代の方は、いわゆるパソコンやメールで、同じような考え方になっているんでしょうか。

安永：どうでしょうね。多分、一緒じゃないでしょうか。

中山：相手の顔が見えなくても、同世代意識というのが非常に強いと思います。

佐野：だから、いいか悪いか別にして、美術界も含めどこの世界にしても、今は変わり時じゃないでしょうか。

安永：私はアジアの方に関わっているものですから、今の日本の若い人を見ているなかで、やはり何か切実さが無いというか、欲望が無いというか、満足しきってるというか…。何でも揃っていますから、次に何を望むか、何が欲しいかが見あたらず、欲求が希薄だから、そこでちょっと停滞している部分もあると思うんですよね。その辺を打破してもらいたいと思います。

大部分のアジアの状況は、非常に貧しいとか、物が無いとか、不平等だとか、努力しても自分の力が認められないとか、そういう苦しい状況の中からはい上がろうという気持ちが見えなさっている。日本の戦後の時代によく似た状況があり、そこからパワフルな新しい力が生まれてきています。

田口：今度の震災というのは、私はもう一つの敗戦だと思います。私は敗戦のとき15歳で、ゼロから急に絵描きになろうと突然発想したわけだけど、あの時代何もなかったでしょ、マイナスしか。だから、別に震災あってよかったなんて言わないけど、若い人を含めて意識がすごく鋭く、ごつくなるかもしれないなと思います。

佐野：私も田口先生と同じ意見で、今を機に、必ずいい方向へというか、どんなことでも我慢できるというふうに思いました。

田口：近年の若い人の「べつに」というような意識が、今度の震災でなくなっていくんじゃないでしょうか。今、アジアが元気というけど、日本もそれに遅れないで、野蛮なぐらい元気になってほしいと思います。

中山：災い転じて福ですね。

佐野：そうです。どこでも我慢できると思って、ああでもない、こうでもないって言うことが何でもなくなりましたね。

安永：それでは、これで座談会を終了させていただきます。先生方、どうもありがとうございました。



死滅回遊
146cm×103cm
村井 香穂 大分県



リフレインIX
162cm×162cm
山口 博司 長崎県



DRAWING-PHOTOGRAPHY 1103
130cm×162cm
山崎 直秀 和歌山県

